

## 近世寺院における出開帳と講中の研究

——水口山蓮華寺の例をもとに——

久我美咲

初めに

開帳とは寺社が所有する秘仏を民衆に対して公開する行事で、近世において非常に盛んに行われていた。持ち主の寺社で開帳を行うことを居開帳、よその地域や寺社で開帳を行うことを出開帳という。近世の出開帳に関する先行研究には、比留間尚氏「江戸の開帳」<sup>①</sup>、鷹司誓玉氏「善光寺の江戸開帳について」<sup>②</sup>、湯浅隆氏「近世的開帳の成立と幕府のその政策意図について」<sup>③</sup>、北村總氏「開帳と講中——身延山久遠寺の出開帳を支えた人々——」などがあり、鷹司氏、比留間氏の論をベースとして展開がなされている。しかし、いずれも江戸を舞台にしたものであり、他の地域における出開帳の研究は非常に乏しい。その結果、先行研究は必然的に「大都市における開帳」という視点に偏ってしまっている。湯浅氏は、近世の開帳は寺社経営補填のための物質的収入を主要目的とし、それが可能だったのは都市のみ、しかも特定の大都市に限定されざるをえなかった、と述べている<sup>④</sup>。しかしながら現実には、大都市を起点としながらもその道中で出開帳が行われている場合があり、江戸あるいは大都市に限ったものではない。そこで本稿では滋賀県甲賀市水口の蓮華寺における、大都市以外での出開帳の一例を示す。延享二（1785）年の史料「蓮華寺講中勤覚」を用い、下野国高田山一光三尊仏出開帳の際の蓮華寺講中の実態、そして果たした役割についてさぐる。先行研究にお

いて北村氏が講中の働きについて、出開帳への参加協力があつたと言及しているものの、その働きについては部分部分について述べるにとどまり、一連の流れとしては捉えきれていないように思う。また、「信者・講中の実態を探ることは、近世における庶民信仰の内実を明らかにする」と、信仰の面を強調する捉え方をしている。そこで本稿では出開帳前からの講中の動きを追い、全体を通しての講中の働きをみていく。その中で宗教行事としての出開帳という捉え方だけではない、より広く地域的な行事としての出開帳、そしてそこに関わる人々の姿を示したい。

水口山蓮華寺は現在の滋賀県甲賀市水口町に位置する、浄土真宗高田派の掛所である。はじめは天台宗寺院であり、寺伝によると聖徳太子の所縁によって創立、後に足利義政によって再建されたが兵火により消失した。その後中興され、現宗派に改めたという。境内の太子堂をもって水口太子堂とも呼ばれる。<sup>⑦</sup>

「蓮華寺講中勤覚」は延享元年(1744)年九月二十二日から延享二年六月七日にかけての、蓮華寺の御堂上棟・入仏、下野国高田山如来(一光三尊仏)出開帳に関する記録である。水口は東海道五十番目の宿場町であり、出開帳の際には蓮華寺は掛所として京都への行き帰りの宿となった。本史料は講中・世話人である中村市郎右衛門が記した覚書で、講中が出開帳等の際に務めた役割が細かく記されており、当時の講中の実態をよく伝える。この史料は本来中村家の所持するものであつたと思われるが、中村家が水口を離れる際に蓮華寺へ持ち込まれ、当初より蓮華寺にあつた古文書と交ざって今に伝わりと考えられる。

浄土真宗高田派には、伊勢国にある本山専修寺と、下野国にある本寺専修寺の二つの専修寺がある。元来は下野国の専修寺が本山であつたが、戦国時代に兵火によって焼失、教団の中心が伊勢へ移り、伊勢国専修寺が本山として定着した。<sup>⑧</sup>その後江戸時代になって下野国の専修寺が復興され、伊勢国専修寺を本山、下野国専修寺を本寺と呼ぶようになった。本史料では主に伊勢国専修寺を「本山」、下野国専修寺を「下野国高田山」と称しているので、本稿でも

それにならうこととする。

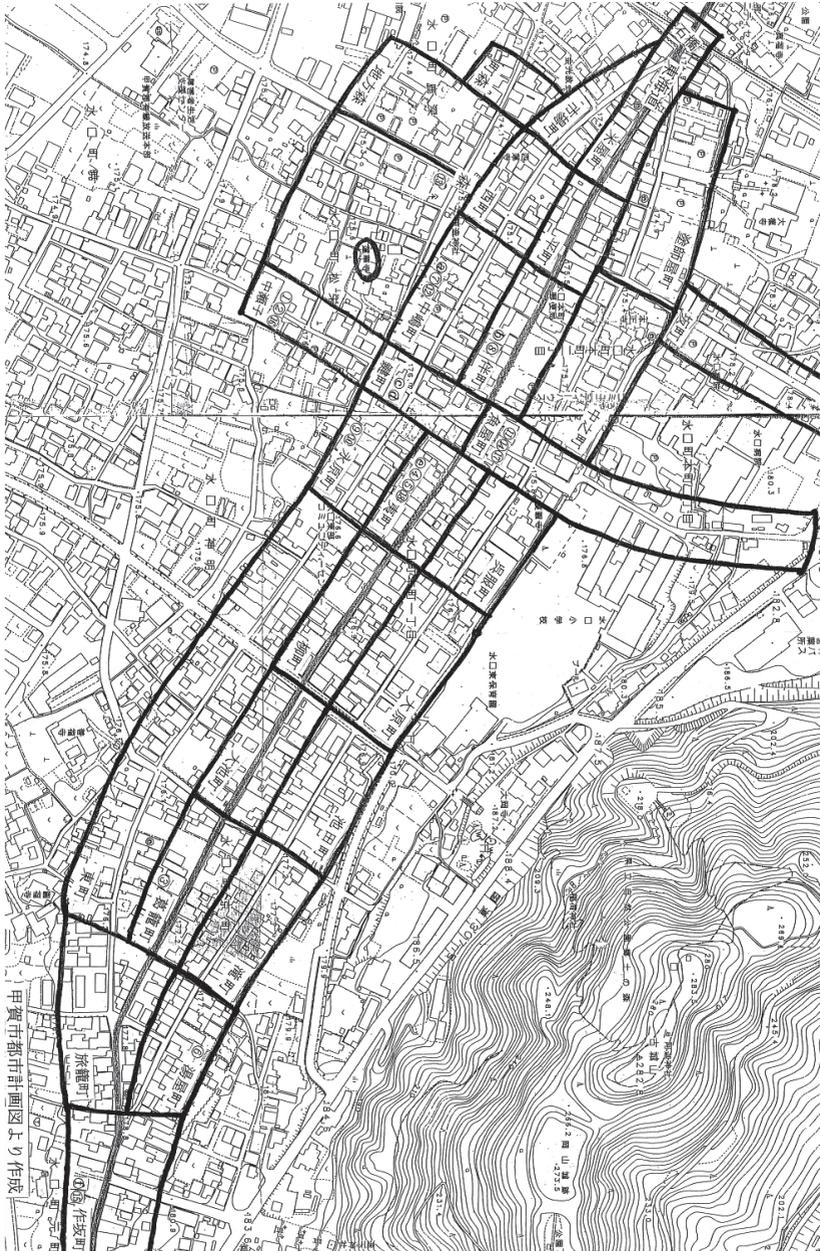
## 第一章 講中の枠組み

まず、講中がいかなる組織であったかという点を検討する。先行研究においては講中と且中（旦那）、講中と世話人の区別をあいまいにしたまま論じているものが散見されるが、蓮華寺講中においてはそのような捉え方は適切ではない。彼らの働きを見ていくにあたって、その関係を明確にしておく必要がある。

組織の構成員について、確認される講中・世話人と、次章の御堂上棟に関わった大工の一覧を次頁に載せた。また、水口の地区に講中・世話人の居住地を記した。以後本稿では人員を把握しやすいよう名前と番号を併記する。

### 講中

- |      |           |      |            |
|------|-----------|------|------------|
| ①中瀬子 | 又四郎       | ⑩永原町 | 五兵衛        |
| ②中瀬子 | 三郎左衛門     | ⑪魚屋町 | 弥右衛門       |
| ③葛籠町 | 善右衛門      | ⑫中嶋町 | 七郎兵衛       |
| ④夷町  | 伝右衛門      | ⑬森   | 佐五兵衛       |
| ⑤夷町  | 助左衛門      | ⑭魚屋町 | 浄安         |
| ⑥湯屋町 | 市兵衛       | ⑮作坂町 | 善右衛門（かしわ屋） |
| ⑦中嶋町 | 又右衛門      | ⑯中瀬子 | 六兵衛        |
| ⑧伴町  | 作右衛門【年行事】 | ⑰魚屋町 | 八右衛門【年行事】  |
| ⑨永原町 | 九兵衛       | ⑱夷町  | 五兵衛        |



世話人

㉑ 中嶋町 碓屋 中村 市郎右衛門

㉒ 伴町 米屋 中村 庄兵衛【年行事】

㉓ 鍵町 塩屋 今村 清兵衛

㉔ 鍵町 又兵衛

㉕ 夷町 大黒屋 中村 五郎助

㉖ 作坂町 源兵衛

大工

㉗ 中嶋町 鳥本 源兵衛

㉘ 米屋町 森田 兵左衛門【惣大工】

㉙ 泉村 小林 太兵衛

㉚ 新城村 三ヶ月 弥助

㉛ 中嶋町 鳥本 七郎兵衛

㉜ 伴町 惣兵衛

㉝ 伴町 富田 四郎左衛門

㉞ 兵左衛門内 五兵衛

女講中

柳町 喜八御袋

葛籠町 善右衛門(㉟) ば、

魚屋町 与兵衛【年行事】御袋

鍵町 清兵衛(㊱) 御袋養清

鍵町 又兵衛(㊲) ば、

鍵町 市左衛門御袋

西町 治部御袋

石王屋敷 おきく

寺 長かい

中嶋町 市郎右衛門(㊳) 母妙寿

\* 居住地、屋号(ある者のみ)、氏名の順。  
なお、番号は史料に登場した順にふった。

「蓮華寺講中勤覚」において、入仏の相談の際の記述に

講中之内相談ニ寄被申候人数之事、中せこ又四郎・三郎左衛門・つゝら町善右衛門・夷町伝右衛門・助左衛門・ゆ屋町市兵衛・中嶋町又右衛門・伴町作右衛門・永原町九兵衛・永原町五兵衛ノ十人相残候、

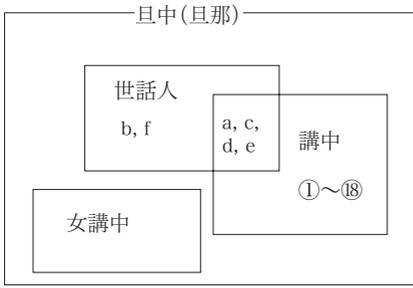


図1

(中略)

世話人之内を伴町庄兵衛・中嶋町市郎右衛門・式人相残候、

と書かれているように、講中と世話人は別のグループとして捉えられている。両者の関係は、上棟の際の記述に

一世話人之内を庄兵衛吉人、

残り清兵衛・源兵衛見へ不申候、尤市郎右衛門・又兵衛・五郎助三人ハ講中ノ方ニ付置候、

とあることから、両方のグループに属する者(講中兼世話人である市郎右衛門・又兵衛・五郎助)と、講中とは一線画した世話人(庄兵衛)とに分かれるといえる(図1)。また、「講中」ではなく「旦那」「旦中」と表記されている者は、檀家ではあるが講中には含まれないと考えられる。旦那ではなく「半旦那」という記述も見られるが、構成員や人数は定かでない。半旦那に属した者たちの性格としては、厳密には旦那ではないが本来の檀那寺が遠いなどの理由で蓮華寺に仏事を頼んでいた人々が推測される。

旦中の内には講中に属する者の息子が、女講中の内には母等がみられることから、講中はそれらより上位の集団であったことがうかがえる。また、女講中の中に名がある「石王屋敷おきく」の存在が注目される。石王氏は水口神社の神主であり、後代では水口において非常に有力な地位にある。しかし当時は支配形態において神社よりも寺院のほうが力があつたと考えられる。そのため、石王氏の関係者も蓮華寺の旦那としてこの御堂上棟・入仏・出開帳に関わつていたことが指摘できる。

確認できる人数では、世話人六人、講中十八人、女講中十人となっている。彼らを含め、出開帳に関わつた蓮華寺旦那中の居住地をみると、東海道が三筋に分かれる米屋町から作坂町までの範囲に絞られる。さらに多くは東海道と南街道の西よりの蓮華寺に近い町に集中している。これに対して手伝いの他門の衆は、文化六(1808)

年の開帳記録<sup>10</sup>によると、旅籠町や大池町などの東方の町と、三筋から外れたより西方の町とが散見される。これらには特に偏りは見られず、周辺の他宗門徒が広く手伝っていることがわかる。

この講中の日ごろの活動内容については、「正月廿八日念仏講有り」「二月廿八日念仏講有り」と、「念仏講」という記述が唯一講中の活動の実態を示すものである。また、入仏の際に「万人講店」という記述があるが、こちらの内容については次章に譲ることとする。それ以外のところでは「講中」とのみ書いていることから、このとき御堂上棟・入仏、出開帳に関わった講中はこの念仏講一種類しかなかったのではないだろうか。また、世話人の清兵衛に関して、この念仏講に参加していることが確認されるため、講中兼世話人とした。

しかし、講中と一般の旦中とをわけるのは何だったのであろうか。そこで考えられるのが太子講の存在である。『水口町志』によると、蓮華寺は元龜二(1571)年に兵火により焼失した後、天正五(1577)年僧恵林中興、同十三(1585)年に僧恵常によって太子堂が再建された。その際、十三名からなる太子講が作られた<sup>11</sup>。彼らは「蓮華寺境内と称し旧幕時代夫役助郷を免ぜられた」というから、その後も一般の旦中とは別格の扱いを受ける立場にあったといえる。太子講は一般に大工や職人の講であるとされるが、天正年間に蓮華寺で作られた太子講は再建のために集まったのであり、大工・職人の集団ではないと思う。蓮華寺の太子講を構成したのは旦中の内の一部の人々であって、延享二年に講中として名を連ねる者たちの中には、このときの太子講の子孫が多く含まれたのではないだろうか。講中がその他の旦中に比べて金銭的に裕福であるということについては以下で述べて行くが、こうした過去がその背景となっている可能性は十分にあるのではないかと思う。つまり、太子講を継ぐ者で、なおかつこの念仏講に参加していた者という存在が推測されるのである。蓮華寺における太子講がどのような活動を伴っていたかはわからないが、一般に太子講は通年の活動ではなく年に一、二度の参会であったとされる。そのため、太子講に参加する者が日常的には念仏講に参加し、そして出開帳などの行事のときには念仏講の一員として働いていたことは十分に考えられるのではないだろうか。

## 第二章 御堂上棟・入仏

八

それでは、「蓮華寺講中勤覚」の内容に沿って講中の働き、様子を検討する。本章ではまず出開帳に至る前の、御堂上棟・入仏についてみていく。

御堂建立の計画は寛保元(一七六一)年から始まっていたが、なかなか進まず、延享元年末ごろようやく本腰を入れて上棟にかかるとなった。この時大工への支払いを世話人三人が立て替えている。また且中からは六百文ずつ集金、それも一度には苦しいので三度に分けて二百文ずつ集金とされたところを、世話人の一部は一括で、しかも余分に出している。世話人が他に比べて裕福であったことの証左であろう。

上棟・入仏の相談は、事前に講中によって幾度も行われている。相談内容は、金子、借り物、他寺への依頼などであり、いずれも蓮華寺側ではなく講中の主導によっていることがわかる。左はその一例である。宛先の常超院、寿福院、一乗寺はいずれも伊勢にある、高田派の寺院である。中でも常超院は「先住蓮花寺完長様之御おとゝ子」であり、蓮華寺とのつながりは深い。

三月廿三日入仏、廿五日迄法事、廿六日と四月二日まで昼夜説法仕度御寺方六七ヶ寺御上り被下候而御勤被下候

様ニ申上候、此節ニ御座候得ハ殊ニ蓮花寺了道様ニも御病氣ニ御座候間御本山様御願之義も宜可御頼申進候事、

二月十日

蓮花寺

講中

常超院様

世話人

寿福院様

一乗寺様

蓮華寺と講中・世話人が連名で説法の手伝いを要請し、手伝いの寺院の数を指定している。体裁は連名となっている

るが、講中・世話人(②⑤⑪a⑬c)の相談によって書かれており、おそらく蓮華寺側はチェックをいれただけではないだろうか。この依頼に対する常超院からの返書に対しても、講中から礼状を認めている。一方で、これらの参会の場合は蓮華寺であり、寺からはたびたび夕食が出されていることから、蓮華寺は逆に講中のサポート役となっていたことがわかる。任職了道が病気であると述べられている点を考慮するとしても、本山・他寺と関わる一連の動きは講中の主体的な活動であるといえる。ただし、寺社奉行への上棟・入仏に関する願書は蓮華寺了道の名で出されている。この際には、「此書附之義大庄屋新右衛門殿・四郎兵衛殿へ御願申上置候事」と、大庄屋を介したことが記されており、地域社会との関係という点で注目できる。蓮華寺自体は町と村の間あたりに位置しているが、そのどちらともつながりをもっていた。

また、寺社奉行への願書の一文に「本堂造作全ク成就仕候迄ハ此上年数も相懸り可申候間造作半ニ御座候得共」と実際には完成には至っていないことが記されており、とりあえず上棟・入仏を形だけでも行いたいという感情がみえている。後の出開帳止宿に間に合わせたいという思いが強かったのだろう。

そうしたやりとりの一方で、市郎右衛門ら講中は立札の準備もしている。上棟を知らせる立札で、水口町内に三ヶ所(石橋・山川・坂町出口)、近村二ヶ村と、蓮華寺近辺に合計で五ヶ所設置している。この立札の形状について、市郎右衛門は縦にしようとしたが、大切な事柄は横板にするべきだと言う者も三、四人おり、いや縦だ、と言う者も四、五人と、意見が二つに分かれてしまった。しかし、横板では「丁人・百姓之芝居之板」のようであり良くないであろうから、「御掛所之御寺ニ御座候へハ堂門板ニ致し可申相談仕候」ということになった。堂門板というのは堂門の形をまねて、四角い板の上に屋根をつけた形の立札であろう。この形こそが御掛所の名にふさわしい格式ある形と判断されたようである。

上棟の祝儀として配る祝餅の準備は主に女講中が、また、上棟当日(三月六日)の大工衆の手伝いは世話人・講中・且中と境内女衆、寺の衆中が行っており、関係者総出で執り行われたにぎやかなものだったことをうかがわせる。当

日は天気もよく、「参詣ノ人数不知、門ノ内ハ人計ニ而御座候、尤は<sup>(草)</sup>か草まで人々相詰居」という程の群集だったという。またこれらの人々には、且中四名と大工二名が係りとなつて餅をまいた。さらに大工衆・惣旦那へは本堂内で酒が振舞われ、特に大工衆・講中・世話人へは夕飯も出された。これらは上棟の働きに対して蓮華寺から出されたと思われる。

上棟のお礼は、大庄屋、御家中をはじめ、町方・地方の寺、近隣の村々三十五ヶ村の庄屋衆、懇ろ方、町々の年行事衆、且中、半旦那餅・昆布を配っている。大工衆へは主だった者には餅も配っているが、概ね熨斗扇子と金子を配っている。加えて、惣大工の兵左衛門(◎)へは上棟で飾られた飾り物を残らず贈っている。これは道々見物人が出るほどだったというから、かなり立派なものであつたようだ。このとき、兵左衛門からは吸物・赤飯・酒にて供応をうけている。また、木挽二名へも金子と餅を届けている。大庄屋たちへのお礼はお祝い、大工・木挽へのお礼は礼金の意味合いを含んでいると思われる。最後に、入用の明細について市郎右衛門、五郎助がとりまとめを行っている。この二名は講中と世話人を兼ねており、そうした立場からこのとき講中内のリーダー的役割を担つたものと思われる。ここでは上棟に五両二分かかったとされているが、蓮華寺が用意した夕食代などは含まれていないと思われるため、実際には諸入用はこれより多かつたと考えられる。

続いて三月九日から入仏の相談が始まる。こちらも講中・世話人による参会が度々あり、本山・他寺との交渉も引き続き講中が行っている。先述した説法の依頼について、勢州から十一ヶ寺が手伝いに来ると申し出があつたが、「此節入用多上棟ニこまり入申候故何とそ七ヶ寺御出可被下候様ニと講中被申候」と、苦しい資金事情がうかがわれるとともに、講中が運営の金銭管理を行つていたことがわかる。また、入仏までの間に堂内の壁塗りや掃除を行つているが、鏡板張りは西蓮寺に頼むなど、人手不足も目立つ。市郎右衛門は仏天蓋洗いを蓮華寺弟子林超坊と二人で行い、飯道寺への花籠の借り物依頼の書状を書くなど、ここでも積極的な役割を果たしている。飯道寺は天台宗の寺院であり蓮華寺とは宗派は異なるが、蓮華寺もかつて天台宗に属していたことから、古く縁があつたのかもしれない。さら

に、規模が大きく道具を貸し出す余裕のある寺院であったために協力を仰いだとも考えられる。また、花籠は一枚でも十枚でも賃銭は百文ずつと講中で決めている。飯道寺からの指定ではなく、借主側が賃銭を決めている点が興味深い。飯道寺側には道具の貸し出しを入仏への積極的な協力とみる意識があったのかもしれない。

そうした近隣の寺院による協力の他に、勢州からの高田派閥系寺院の手伝いもあった。入仏の手伝いを頼んでいた寿福院が事前に来ており、「花籠十人前、花ひん其外いろいろ々々御持ち被下候」と入仏に使う道具を持参している。これらは不足している旨を蓮華寺から伝えたのかもしれない。

より大がかりな準備としては、戒名店・万人講店の設置がある。これは入仏の当日に参詣者からの賽銭を集めた場所であり、この日に仮小屋のようなものを建てたと考えられる。この準備に携わったのは「町森六右衛門・此方森市右衛門・四郎兵衛」の三名である。彼らがこの仕事を行うことになった理由については、「此三人衆中ハ寺ノ入用銭集メ申候処断ニ付一日二日ハ参可申と断ニ付相見へ申事」と、寺の入用銭を払わなかったかわりに一日二日の労働を行うという約束であったことがわかる。三名は恐らく払わなかったというよりは払えなかったものであり、「夫故精出し」他の人々とは別に働いたのである。この仕事は市郎右衛門の指図によって行われたが、「外ニ何れも見へ不申候事」とあることから、他の講中以上に市郎右衛門が細やかに働いていたことがうかがえる。また、この三名は講中ではないので、且中か半旦那であると考えられるが、このことから入仏に際しても彼らに一定の金銭負担が課されたことがわかる。そして払えなかった場合には右のように労働による支払いが求められるなど、その金銭負担は極めて義務的であったといえる。

また「万人講」であるが、講中ではない三名が万人講店の設置を行っていることから、講中（念仏講）とは異なることが推測される。一般に万人講とは寺社に参詣したり堂塔の建立修理などに寄進したりするために多人数で作る講中のことをいう。ここでも万人講店と称して入仏の日に賽銭を募っていることが確認されるので、賽銭を納め、結縁した者はみな万人講のメンバーとして扱われるという敷居の低い講といった感覚だったのではないだろうか。「万の

表1 当寺如来様瓦奉加・参物・改名  
いろいろ々々

3/23昼	錢三貫六十貳文、米貳升三合
3/23夜	五百三十貳文
3/24昼	六百七十一文
3/24夜	九百十二文
3/25昼	壹貫百文
3/25夜	壹貫三百五文
3/26昼夜	壹貫百六拾文
3/27昼夜	壹貫四百十六文
3/28昼夜	壹貫貳百十三文
3/29昼夜	九百六十七文
3/30昼夜	壹貫百六十三文
4/1昼夜	壹貫四百七十二文
4/2昼夜	壹貫四百六十七文
〆而拾七貫三百六十三文	

人の講」という名にふさわしい実態が想像される。そしてこの賽銭は御堂上棟の不足分を補う目的だったと考える。しかし、ここでの万人講は常態に活動をもつものではなく、賽銭によって万人講に名が加えられるといった程度のものであったと思われる。

右のような準備の後、三月二十日、「太子様上人様十王様」が本尊に先駆けて本堂へ移される。「太子様」は聖徳太子像、「上人様」は「天拝三尊仏御開扉記」に「聖人御木像」とみられることから、親鸞聖人の像のことであると考えられる。「十王様」は元は蓮華寺のものではなく、水口四箇堂の一つ十王堂のものと考えられる。十王堂は門前中嶋町にあったとされ、その旧仏の十王脱衣婆木像が蓮華寺に伝わるという<sup>14)</sup>。

こうした準備が終わり、ついに入仏の日が訪れる。三月二十三日午刻、境内から中瀬子を通り、門をくぐってから本堂へ入っている。門から入ることで入仏をアピールし、わざわざ参拝者に見せることを意識していると考えられる。また、如来の御輿は講中の手によって本堂へ運び込まれている。やはり講中は、且中の内のトップ集団であったよう

である。勢州からの手伝いで来た常超院が如来を須弥壇に上げ阿弥陀経一卷を読経、蓮華寺住職了道が焼香、御経一卷読経し引き取る。手伝いに来た中でも、蓮華寺と親族関係にある常超院が主となって入仏を執り行ったことがわかる。また、了道が主導せず早々に引き取ったのは病のためだと思われる。

この入仏を通しての収益は拾七貫三百六十三文とされる(表1)。賽銭は戒名店・万人講店で集められた。二十六日には一条寺とその弟子以外は勢州へ帰ることとなり、礼金として「八ヶ僧此方へ金子百疋宛御礼仕候、外二御上り之御入用

金壹歩遣申候、供二壹人貳百文遣申候」としている。このとき、帰路のつきそいとして二名を雇い、八百文を支払っているが、「此八百文ハ寺ぢさいせんノ内ニ而遣候事」とあることから、逆に八ヶ僧への礼金は寺から支払われたのではないと考えられる。おそらくは講中・且中よりの集金から出されたのではないだろうか。

また、借り物の返却など事後処理については、「廿三日ハ四月三日迄且那割合ニ仕候而、十二人ツ、式通り廻り相勤被申候事」と且中が組織的に行動していたことがわかる。市郎右衛門自身は「私義昼夜三月廿三日ハ四月二日迄見廻申候而相勤進申候事」と、一般の且中とは別行動をとっており、入仏当日から片付けの終わるまで全体の監督役をしていたと考えられる。

### 第三章 出開帳

#### 第一節 開帳前の動き

延享二年の出開帳については、少なくとも前年には知らされていた。蓮華寺には勢州・京都間の行き帰りに泊まることになっており、行きは四月十二日に一身田を出発し、夜に蓮華寺にて「慈智院其外役人共都合三十人程止宿」につき、「右三拾人程之支度用意其寺ニ而可被申付」とされている。さらに、翌七日に蓮華寺から寺社奉行宛てにこの旨を伝える書状を認め、上棟の際同様大庄屋へ上げ置いている。また、慈智院が一光三尊仏とともに移動していることから、慈智院が現地での出開帳の監督役であったことがわかる。慈智院は伊勢国一身田の専修寺東に位置し、本山専修寺の塔頭寺院の一つである。出開帳では本山の代表という立場を務めたと考えられる。

この時には蓮華寺での開帳願いについては触れておらず、八日昼の参会においても借り物等の相談をして早めに帰ったとされている。しかしその後暮れ方より夜七ツ刻まで市郎右衛門・庄兵衛・清兵衛・五郎助(㉠㉡㉢㉣)の世話人四人による相談が行われ、「此度如来様蓮花寺様ニ而一日御開帳仕度御願」について願書を書いている。

乍恐奉願上口上

願主水口惣御門下

一 御掛所

水口蓮花寺

本堂建立ハ先住義海素立成就有之候而去年子四月病死被致候、右当寺ハ檀家少分ニ御座候而諸般建立事難仕、依之先住義海水口之地頭江被願候而領分中町在共ニ托蓋ニ計多年之間毎日無懈怠丹誠有之候、同人他門一同ニ志をはこひ漸本堂成就仕候、且又御懸所故此節 御宿之御用も被仰付候故少分ニ成共別ニ座敷も建立仕度願望ニ而大方ニ仕立置死去被致候、依之当住入院後早速座敷・廊下一所ニしふ立成就有之、諸事先住之通ニ相動可申と領主江願被出、無相違相濟、去年十月より托蓋被始候処十二月下旬ノ病氣指起り行歩難叶無油斷養生有之候ても急々快気仕兼申候、然ハ本堂も瓦未ふき不申座敷もやねをふさき候迄ニ而戸側もいまたしまり不申両方共風雨之節及大破ニ可申敷と住持・且中共ニ迷惑ニ奉存候へとも住持ハ大病故当分何之働も難叶且下ハ少分ニ而皆貧家共至極迷惑仕候、依之乍恐奉願候ハ 高田 如来様御上京被遊御止宿被 仰付候、何卒京都方御下向之節一日蓮花寺ニ御逗留被遊御扉御開キ御門下を始町中へも拝見を御免被成下并參物を蓮花寺造作料ニ被下置候ハ、外間宜敷難有奉存候、唯今之通ニ而者次第ニ破談仕計ニ而成就之模様曾無御座候、御掛所と申 御外間も乍恐氣之毒ニ奉存候間何卒願之通御免被成下候ハ、御門下一同ニ難有可奉存候、已上、

乙丑四月九日

蓮花寺御門下惣代 助左衛門印

善右衛門印

慈智院様

五郎助印

注目すべきは、願主水口惣御門下とされ、差出も助左衛門・善右衛門・五郎助(⑤⑬④)の連名になっており、蓮華寺の名がみられない点である。この件の主体が蓮華寺ではなく講中の側にあることは明白である。さらに、願書の相談は世話人四人によって行われたにも関わらず、五郎助(④)以外の世話人の名は無い。助左衛門と善右衛門(⑤)は願書を提出に行く二名であるため名を連ねていると考えられ、五郎助(④)は市郎右衛門(①)と共に講中の

リーダー的役割を果たしていたことから連名としたのではないだろうか。市郎右衛門(①)の名はここにはないが、他の書状においては「蓮華寺且中惣代」として名がみられる。清兵衛(②)に關しても、京都本誓寺末寺安立坊から蓮華寺弟子である林超坊を弟子にしたいと頼まれた際には一切を取り切ったとされ、蓮華寺内部の事情にまで深く関与している。母も女講中に参加するなど随所で表立って活動している様子がみられる。これに対し庄兵衛(③)は世話人として相談に参加したり、金子を工面したりはするものの、個人として蓮華寺に深く関与はしていない。つまり、庄兵衛が外されているのは、庄兵衛が講中には含まれておらず、寺院運営に関わる人物ではなかったためだと考えられるのである。

一方、宛先は慈智院であり、下野国高田山の如来出開帳であるにも関わらず勢州へ願ひ出ている。勢州・京都間の移動であることと関係しているのかもしれないが、基本的に願書や書状は勢州宛で出されており、勢州本山が取り仕切っているといえる。

内容を見ると、散物を造作料にあてたいと願ひ出ている。掛所であるがゆえの出費があることを示し、外聞を気にするそぶりをみせるなど、私欲での要求ではないことをアピールしている。また、檀家が少なく、皆貧しいことをくり返し述べている。『水口町志』によると、「江戸時代の水口の家数について記した記録では、大体どれをみてもこの寛永頃九〇〇余軒という数字が最大である」とされ、以降は減少の道をたどる。そして伝馬町として寛永十二(1635)年に「一〇〇人一〇〇疋の継立て」を命じられたものの「実際には八一疋で出発したような底の浅い経済的基礎しかもたぬ」町であり、中でも延享頃の窮乏は非常なものであった。<sup>(16)</sup> こうした状況下では、困窮した且中から御堂上棟に足るだけの資金を得ることは不可能であっただろう。しかし散物を蓮華寺造作料とすることは許可されず、出開帳の是非については返答待ちとなったまま、京都市の如来を迎えることとなった。

如来止宿当日、一乗寺、林超坊、袴姿の講中十四名が出迎えに行き、その他の且中で料理などの準備を執り行っている。一乗寺は三月二十一日に入仏のために来て以来、病気の了道の代わりに説法などさまざまな手助けをしており、

この出迎えも林超坊とともに了道の代参を務めたと考えられる。

如来は暮六ツ刻に蓮華寺本堂へ着く。先払いを且中二人が務め、「如来様御輿」「御宝物」「慈智院様御乗物」「河部縫御乗物」を迎える。このとき「外二勢州講中大分之御供被成候」と、下野国高田山からの講中ではなく本山の講中が出開帳の世話係りとして働いていることがわかり、如来を所持する下野国高田山よりも勢州の本山が出開帳の主となつているといえる。このように本山の影響力が強いのは特徴的な点であると思う。高田派の本山・本寺という独特の関係によるものだと考える。寛政六年に一身田へ本山を移して以来、本山と本寺の住職は兼帯となつている。

このとき一光三尊仏のみを下野国高田山に残し、他の霊像・宝物などはすべて一身田に運んだという。<sup>(18)</sup> こうした実態のため、高田派一番の霊像といえる一光三尊仏は本山ではなく下野国高田山にあり、しかし出開帳の時には本山の仕切りで行動する、といういわば二重構造のような関係になつていたのである。

翌朝如来一行は出発、御迎えの際と同様且中二名が先払いを務める。ただし、見送りの講中は半分の七名であり、蓮華寺からも同行は林超坊のみで一乗寺の姿はない。出迎えの丁重さに対して見送りは簡素である。「借り物いろいろ々々早々二十三日ニ持せ遣申候、夷町大こく屋五郎助・いかり屋市郎右衛門兩人世話仕候而何方へも遣候事」とあるように、残りの人員は後片付けのために見送りをしなかつたようで、出発の際にはそれほど丁重な扱いは求められなかつたものと思われる。

## 第二節 出開帳準備

如来一行が発つた日の夕から、出開帳願いの相談が再開される。止宿翌日であるためか、この日に限っては参会の場は蓮華寺ではなく五郎助(㉔)宅である。集まつたのは市郎右衛門、庄兵衛、清兵衛、五郎助、助左衛門、善右衛門(㉕)(㉖)(㉗)(㉘)(㉙)の六人であり、前回相談の関係者と一致している。この六名が中心となつて事を進めていたことは明らかであろう。翌日もこの六名が寺にて参会し、出開帳と相成つたときには「一乗寺様ニも其時分ニハ何とそ御

出被遊被下御世話成し被下候様」約束を取り付けている。また、願い出る際にいくらか差上げたいが、「大分寺之入用懸り可申候哉と講中被申候二付」、相談の結果「いろいろ々々入用多候とも且中へかけ不申四五人として」まかなうことと決めた。また、「四五人として指出し且中へも寺へも相かけ申間敷」としていることから、一般の且中や寺の会計へも負担を掛けまいとする意識がうかがえる。おそらくこの「四五人」は金銭的余裕のある世話人、それもここに集まった四名の世話人が中心であったと推測される。

そうした本山への開帳願いと平行して寺社奉行へも願書を提出している。慈智院へ願い出るだけでは弱く感じたのか、寺社奉行から出開帳の許可をもらい、それを理由に本山へ願い出ようという意図がみえる。この願書も且中から出されており、市郎右衛門らが考え得る限りの手段を尽くそうとしていたことがわかる。その甲斐あってか、再び京都にいる役僧へ願書を出すように仰せ付けられる。そこで、「何分ニも御開帳願申度候二付此六人之義ハ」相談し、「此度入用之儀不足仕候分ハ清兵衛・市郎右衛門・庄兵衛右三人外ニ少々ニ而も助左衛門・五郎助・かしわ屋善右衛門六人として相遣し寺へも旦那中へも少々ニ而も相かけ申間敷と」決めた。出開帳を求めるリーダーとして働くだけでなく、世話人を中心に金子の自主的な負担もしている。それほどに彼らにとって出開帳は悲願だったといえるだろう。また、入用の不足分は、先に願い出たとき同様寺へも他の且中へもこれ以上負担をかけないよう決めており、彼らの蓮華寺全体への気配りがうかがえる。

こうした働きがかなって、京都で慈智院から出開帳の許しを受ける。このとき、「御本山表へも今一尾申上相談仕近々ニ御本山方御飛脚蓮花寺へ可参」としながらもその場で許可を出していることから、慈智院が現場の監督のみならず、この出開帳における最高責任者であったと考えられる。ただし、このとき立札の許可、宝物披露も同時に頼んでいるが、宝物披露に関しては後日断られることになる。

後日五月九日、念願かなって本山より出開帳を許す旨を記した書状が届く。早速市郎右衛門・五郎助・清兵衛(㉞)の世話人三人は蓮華寺へ寄り合い、この書状を読んだ。これが夕方であったので、「講中へハ明朝御寄被成」

よう伝え、解散している。出開帳を求める段階では世話人・講中の内でも限られたメンバー、おそらくはより裕福で、また蓮華寺の経営に積極的な役割を果たしたメンバーだけで行われていた相談が、出開帳実現の段階に来てついに講中全体の議案となったのである。

大がかりな準備としては、五月十六日に「はり出し」が作られた。これは「本堂前通り二はり出し仕候」とされ、杉丸太、大竹で作られている。杉丸太は買い置きがあったものを、大竹は寺にあったものを使い、どちらも都合があった、と述べている。こうしたことから、この「はり出し」は本来の御堂上棟においては作る予定の無かったもので、出開帳にあわせて作られたことがわかる。出開帳当日には「大分参詣、本堂はり出し共二つまり」とあることから、臨時に人が入れる場所として設けられたと考えられる。そして「当寺如来様小家かけ本堂ノ東方ニ西向ニ仕建申候」と、仮小屋を建てて本尊を移し、出開帳当日には「本堂二而如来様」を世話している。本来本堂に安置されていた蓮華寺本尊を仮小屋へ移し、格の高い一光三尊仏を本堂に招いたわけである。

出開帳にあわせて、もう一つ市郎右衛門たちが苦心したことがある。先にも触れた宝物披露である。専修寺は本山を伊勢に移したときに、一光三尊仏のみを残して他の宝物類は全て伊勢に移した。そのため、この出開帳に同道した宝物のほとんどは下野ではなく伊勢から来たものだと考えられる。京都において慈智院より出開帳の許可が下りた際、同時に宝物の披露も行ってくれるよう頼んでいるが、そのときは不許可となっていたようである。宝物披露は本堂内、内陣で行おうとしていたらしく、市郎右衛門らは「内陣相願此參物を当寺ノ分ニ仕度候よし」と、宝物披露によって得られる散物を蓮華寺の収益にしたいと考えていた。御堂上棟の任用にあてようと思っていたのだらう。一光三尊仏の出開帳に加えて宝物披露でも重ねての冥加料を、と考えていたに違いない。しかしこの頼みは「御宝物当寺二而御披露無御座」と許可されない。そればかりではなく「内陣入も成り不申候」と、宝物を内陣入りさせることすら許されなかった。しかし諦めきれなかった講中は、五月十六日、再び願い出る相談をしている。この日は市郎右衛門・庄兵衛・清兵衛・五郎助・三郎左衛門・助左衛門・又右衛門 (a)(b)(c)(2)(5)(7) の七名が蓮華寺で寄り合いを行

い、長引いたため蓮華寺からは夕飯が出されている。この参会が夕食時までかかったのは、京都へ出願に赴く者がなかなか決まらなかったからである。おそらく京都市の費用は自分たちで負担しなければならなかったと考えられ、度重なる出費になかなか決められなかったのだろう。結局、清兵衛(◎)が鍵町忠兵衛と、供として中瀬子の岩之助を雇って行くこととなった。市郎右衛門は全体のリーダーとして水口に残り、それ以外の人物の中から世話人兼講中であつた清兵衛が行くことになったと考えられる。忠兵衛・岩之助はこの場にはいないことから、清兵衛が個人的に交渉したのだと思われ、費用も清兵衛が出したのではないだろうか。

しかし、慈智院の決定は覆らなかった。その言い分を、清兵衛は「御開帳信心之事二而ハ無御座候由御止メ被成と被仰候」と伝えている。御堂上棟のための資金集め、という目的は、慈智院には信仰心によるものではないと受け取られていた。こうした「信仰目的か金銭目的か」という議論は先行研究においても度々なされている。湯浅氏は、近世の出開帳を幕藩体制下における寺院経営のための募財活動として捉え、神仏への寄進という意味合いを徹底させることで民衆への負担転嫁を隠蔽した、と述べている。<sup>19)</sup>つまり出開帳は、神仏という衣をまとうことによつて募財という目的を覆い隠したものだということである。しかし、果たしてその理論は正確であろうか。

まず出開帳について検討すると、本山では前年の延享元年に如来堂上棟が行われており、出開帳での収益はこの入用に多くあてられたと考える。そのため、本山にも蓮華寺にも確かに寺院経営のための募財という意図があるといえる。しかし、民衆への負担転嫁の隠蔽があつたとはいえないのではないだろうか。市郎右衛門らは勿論募財を念頭においている。ここまでの一連の働きをみても、講中は一般民衆というよりは蓮華寺側の人間であることが明白であるから、当然である。ではこうした意識が一般民衆になかつたかという点、ないはずはないと思うのである。蓮華寺の御堂上棟がなかなか進まないことは他旦にとつても周知の事実であり、そこに「出開帳」というビッグイベントが来れば誰でもそこに「御堂上棟のための募財」という意図を感じ取るだろう。そしてわかっている、そこに参詣して冥加料を納めるといふ民衆の行動は信仰心によるものなのである。つまり、当時の人々にとつて、「神仏に寄進すること

「寺社経営の一助となること」信仰心」であった。

この慈智院の宝物披露不許可をみるに、延享二年時の専修寺は宝物披露を募財のための手段としてではなく、純粹に信仰として扱っている。出開帳自体を信仰心によるものではないとしながらも一光三尊仏の披露は行うということと照らし合わせてみると、本山にとって出開帳は募財、宝物披露は信仰、という意識があったと考えられる。一光三尊仏への散物は全て本山分となる取り決めて、蓮華寺にはその場で募った冥加銭の分しか収益がなくなるため、市郎右衛門ら講中にとって宝物披露の可否は大きな問題であっただろう。一度は断られた宝物披露を再度願っていることからそれはうかがえる。しかし、信心ではないから許可できない、と言われた折には素直に引き下がっている。講中にとっても、御堂上棟のためとはいえ宝物披露を募財の手段とすることには後ろめたさがあったのかもしれない。

#### 第四節 出開帳当日

以上のような準備の後、出開帳の日を迎えることとなる。慈智院ら高田山如来一行は五月十九日に京都を出発、大津宿にて一泊する。翌二十日、世話人の源兵衛(㉑)、講中の善右衛門(㉒)と且中二名、さらに且外の西町佐兵衛の合わせて五名が、大津宿を出発する高田山如来一行を迎えに出向いている。このとき、且中の四名は袴姿で行っている。また当初は且中である西町治部にも頼んでいるが断られている。且外の佐兵衛が共に行ったのは、都合の悪かった治部から佐兵衛に代わりを務めてくれるよう頼んだのではないだろうか。続いて泉村(現水口町泉)まで世話人の又兵衛(㉓)、講中の助左衛門・市兵衛・又右衛門・五兵衛・弥右衛門・七郎兵衛・浄安(㉔㉕㉖㉗㉘㉙)の七名、且中十二名の合わせて二十名が袴姿で出向いている。この且中の中には「神役ノ五兵衛」という者がいるが、これは水口神社の神職であると考えられる。さらに、彼らとは別に「先払」二名がおり、蓮華寺の且中が水口から泉村まで出向き、道中一光三尊仏の先払いを務めたことがわかる。最後に林口村(現水口町林口)まで世話人から市郎右衛門・庄兵衛・清兵衛(㉚㉛㉜)、講中から三郎左衛門・善右衛門・九兵衛・六兵衛(㉝㉞㉟㊱)、且中三名、慶円寺且中十

一名、蓮華寺名代として林超坊、さらに勢州からの手伝いで来ている寿福院の弟子真玉坊が出向している。林超坊が名代として出向いたことについては、「但し蓮花寺了道様ハ御病氣ニ付如此」と断り書きがあり、本来であれば住職である了道が出向くべきであると考えていたことがわかる。また、慶円寺は水口の呉服町に位置する寺院である。市郎右衛門が度々述べているように蓮華寺の且中が少なかつたため、盛大にもてなそうと近くの慶円寺に手伝いを頼んだものと思われる。

出迎えに向かった中で最も遠い大津宿へはたった五名しか行っていない。また、一番近い林口村までしか行っていない講中・且中の面々については「老人之義故如此仕」、市郎右衛門ら世話人については「寺二而世話人故早々出申候義茂かね申候故漸々林口まで」とそれぞれ老人であるから、世話人としての仕事があつたから、と理由を述べており、本来ならばより遠くまで迎えに行くべきであつたことを記している。そして大多数のものは泉村へ迎えに行っていることから、泉村への出迎えというのを基本として考えていたことがわかる。世話人の中で五郎助(◎)のみ名がみられないが、息子の利右衛門が泉村へ出向いている。他の者はみな町名と名だけが書かれているところを、わざわざ「夷町五郎助子息利右衛門」と記されていることから、利右衛門が五郎助の名代として出向いた可能性が指摘できる。また、大津宿・泉村にそれぞれ一人ずつ世話人を向かわせており、出迎えは世話人が手分けして引率したと考えられる。

その頃、出迎えに行かなかつた且中は料理や道具の準備に追われていた。市郎右衛門・庄兵衛・清兵衛が世話人の仕事で忙しかつたというのは、こうした準備の指揮を取っていたからだろう。五郎助が出迎えに行っていない理由としても、最後まで蓮華寺に残って準備をしていたという可能性がある。

二十日の暮れに、高田山如来が蓮華寺に到着する。その際、「凡御人数廿七、八人、三拾人まで、其外ハ木屋・平野屋・かしわ屋方へ御出御泊り」とされている。「廿七、八人、三拾人まで」とは、往路で「慈智院其外役人共都合三十人程止宿」とされた人々とほぼ対応していると考えられ、出開帳を通して同じ人たちが一光三尊仏の供をしたこ

とがわかる。

夜四つ刻に翌日の開帳準備が整うと、四つ半過ぎに旦中へ先んじて一光三尊仏が披露された。このとき残っていたのは十四人で、市郎右衛門は早々に帰った人や来なかつた人たちは残念であった、と書き残している。このとき残っていたのは講中・世話人・年行事に含まれる人々で、当日は忙しくなることを見越しての開帳だったのである。

翌日は明六つ刻より開帳が行われ、参詣者が途切れなため予定をややオーバーして七つ半まで披露された。市郎右衛門はこの様子を「凡六七万人と相見へ申候、十万人も御座候様二申候」と述べている。大げさにも思えるこの人数の真偽はわからないが、本堂・はり出しともに人がつまる程の参詣者であったというから、随分と盛況であったことは間違いない。また、門前内両脇には「大山仁兵衛・仁左衛門、外二七、八人相詰申候」とある。大山仁兵衛は水口の非人頭であり、仁左衛門以下七、八人はその配下だと思われる。彼らは当日の現場警備を行ったと考えられる。非人頭である仁兵衛自らが警備を務めたことも、この出開帳が蓮華寺だけの行事ではなく水口の町全体を巻き込む重要な行事として捉えられていた証左となろう。

この朝の開帳では一光三尊仏へ蓮華寺より銀二両、門下中より金百疋が納められた。また、門下中とは別に個人的に市郎右衛門と清兵衛 (a) (c) より銀一兩ずつ、庄兵衛 (b) より銀三分が納められた。門下中としての冥加料も当然一般の旦中より多く出していたと思われ、彼らの経済的な豊かさは他を圧倒していたことがここでもうかがわれる。それと同時に、その金銭を蓮華寺造作料とはせず下野国高田山の一光三尊仏へ差し出していることから、この出開帳に対する彼らの姿勢が単なる金銭収集だけではなく信仰を伴ったものだったと判断される。

さて、七つ半に一旦閉帳となった一光三尊仏であるが、その後になって来た参詣者が再びの開帳を頼み、結局四度の開帳が行われた。この状況から、開帳は当初の予定時間以外にも柔軟に行われていたことが確認できる。

翌日の見送りは、「旦中惣出二申渡」とされているが、実際には総出とはいかず二十七名となっている。他に、慶円寺且那七名、その他且外四名の名が確認される。且中ではない人々が見送りに参加していることから、この出開帳

が一つの寺院を超えた枠組みで行われ、蓮華寺だけでなく地域をあげての一大イベントだったといえる。

### 終わりに

最後に出開帳の収益であるが、本山分が約七十七貫文、蓮華寺分が十七貫九百十三文とされている。蓮華寺では、「兩二錢四貫五百七十五文かへ二而六兩壹分」とされているので、十七貫九百十三文では計算が合わず、二十七貫文九百十三文の誤りだろうと思う。この収益の本山の内訳は「参物」約四十八、九貫文、「御飯・御縁記・じゅす・御影いろ々々」約二十貫文、そして銀八、九十匁、金百疋となっている。一方蓮華寺分はそれぞれの金額は不明であるが「当寺如来様瓦奉加・参物・改名いろ々々」「手水所いろ々々」となっており、どの名目で集められたか、どこで集められたかによって収益の配分が決まっている。また、蓮華寺では縁起は用意していないため、ここにもみられる「御縁記」は一光三尊仏のものであり、本山が用意したと判断できる。つまり、本寺・本山に関わるものは全て本山分となり、蓮華寺分は開帳に便乗した募財のみであることがわかる。果たしてこの収益で上棟の不足分を補えるのか、その点については一切記述がないのでわからない。しかし出開帳には、平時では望むべくもない多くの且外の衆が参詣し、寄進をした。資金不足で行き詰っていた上棟をなすための有力な手段となったことは間違いないだろう。その中で講中の働きは寺院の「手伝い」という域をはるかに超え、むしろ蓮華寺経営の主となっていた。住職が病気であつても、弟子の林超坊がいたのであり、講中に替わって蓮華寺が主導することも可能だったはずである。しかしそうならなかったのは、やはり出開帳を計画し実行したのが講中の主体的な行動によっていたからであるといえる。

### 注

(一) 比留間尚「江戸の開帳」『江戸町人の研究第二巻』吉川弘文館、1973

- (2) 鷹司誓玉「善光寺の江戸開帳について」『佛教大學研究紀要』佛教大學學會、1963
- (3) 湯浅隆「近世的開帳の成立と幕府のその政策意図について」『史観 第九十冊』早稲田大学史学会編、1975
- (4) 北村總「開帳と講中―身延山久遠寺の開帳を支えた人々―」『立正史学 (41)』立正大学史学会、1977
- (5) 前掲注(3) 二十九頁
- (6) 前掲注(4) 三十一頁
- (7) 『滋賀県の地名 日本歴史地名体系25』平凡社、1991 三七二頁
- (8) 真宗高田派本山専修寺 HP <http://www.senjiji.or.jp/index.php>
- (9) 前掲注(8) (真宗高田派本山専修寺 HP) による。寛永十五(1638)年七月二十五日に一身田の木像親鸞聖人御影を下野高田へ移し入仏している。翌日下野高田一光三尊仏開帳。
- (10) 蓮華寺文書(以下蓮華寺とのみ記す) 1-165  
(1-165)  
〔表紙〕  
巳四月  
御開扉中諸通  
二冊之内 蓮花寺世話方  
「他門方」として東町・片町・作坂町・旅籠町・葛籠町・柳町・夷町・伴町・平町・塗師屋町・天王町・大池町・河内町から一光三尊仏の出迎え(もしくは見送り)の手伝いに来ている。
- (11) 『水口町志 下巻』水口町志編纂委員会編、山川書店、1977 一四二頁  
なお、「元龜十三(1585)年」と誤記されていた部分について、「天正十三(1585)年」と訂正しておく。
- (12) 前掲注(11) 『水口町志 下巻』 一四二頁
- (13) 蓮華寺が地方森に位置するため、「此方森」とは地方森のことを指すと考えられる。
- (14) 十王堂、文殊堂(現西蓮寺)、子縁堂(現円福寺)、順礼堂(現真福寺)(文殊堂以下いずれも浄土宗)。
- (15) 前掲注(7)

- (16) 『水口町志 上巻』水口町志編纂委員会編、山川書店、1977 一九七頁
- (17) 前掲注(11) 『水口町志 下巻』 二二五頁
- (18) 『全国寺院名鑑 近畿篇 改訂版』全国寺院名鑑刊行会編、史学センター、1976 三頁
- (19) 前掲注(3) 三六頁
- (20) 前掲注(8) 真宗高田派本山専修寺H卅
- (21) 「蓮華寺講中勤覚」の史料中で「浄安(14)」の名が泉村への出迎え、林口村への出迎えの両方に重複して書かれている。林口村への出迎えは人数表記がないが、泉村の方は「メ式拾人」と人数が明記されており、正確に数えたと受け取れるので、浄安は泉村への出迎えでカウントしておく。

# A Study of “Dekaicho” and “Kochu” at Temple in the early Modern Period: Taking “Minakuchi-San Rengeji” as a case example

KUGA Misaki

## Abstract

The purpose of this thesis is to make clear the role of “*Kochu*” in “*Dekaicho*” at the temple in early modern period.

“*Dekaicho*” means that the owner exhibit a Buddhist image at some other temples. It was the very big event for the temple, believer, and society.

In the first chapter, I explain what kind of group “*Kochu*” was. The member of *Kochu*, in *Rengeji*, were different from general believer. They were the main supporter of *Rengeji*, and they were wealthy. In addition, Among them, people called “*Sewanin*” was a leader. They were important caretaker in all of *Rengeji*.

*Rengeji* was rebuilt and the Buddhist image was put into the main temple again. In the second chapter, I confirm what *Kochu* did then. The chief priest got sick a lot, *Kochu* has been working mainly made across the board and preparing requests or other help to the other temple.

In the end, I take up *Dekaicho* in the third chapter. After completion of framework, but *Rengeji* was unfinished. So *Kochu* planned *Dekaicho*. They negotiated with head temple themselves. And I consider the state of the prior day preparation. As a result, to clarify the actual situation that *Kochu* had become a main management rather than *Rengeji*.